千葉県立
中央博物館
編集・発行
平成31年3月

中央博物館だより

No. 73

企画展のご紹介

（平成31年7月13日～9月23日）

動物学研究科　下稲葉さやか
生態学・環境研究科　宮川　尚子

陸のモフモフ！　海のツルツル？　あつまれ「ほにゅうるい」

平成31年度の企画展のテーマは「ほにゅうるい」。身近な動物たち、動物園の人気者、ちょっと変わった珍獣（ちんじゅう）まで、世界・日本・千葉県に生息する多様なほ乳類のはく製やホネを展示して、形や暮らし方を紹介します。

◆私たち「ヒト」もほ乳類！

私たちヒトも、ペットのイヌやネコも、ほ乳類の仲間です。他にも、ほ乳類にはいろいろな姿や暮らし方をしているものがいます。

住む場所の種類だけでも、地上のほか、海を泳ぐクジラ、空を翔（と）ぶコウモリ、地面の下に穴を掘って暮らすモグラ、樹（き）の上に住むリスやサル、ナマケモノなど様々です。

そんな多様なほ乳類ですが、他の動物にはなくほ乳類だけにみられる共通の特徴（とくちょう）が、20種類以上もあります。ここではその一部を紹介します。

特徴（とくちょう）　その1

こどもに乳をあたえて育てるための、乳腺（にゅうせん）という組織があります。

「哺乳（ほにゅう）」とは乳を口に含ませるという意味なので、「ほ乳類」の名前の元になる特徴です。卵を産むカモノハシも、乳腺からにじみ出る母乳を赤ちゃんにあたえます。

おなかの袋で子育てをするカンガルーなどの有袋類（ゆうたいるい）にも乳腺があり、袋の中で授乳して育てます。

特徴（とくちょう）　その2

表情筋が発達しています。母乳を吸うために、口の周りなどの顔の筋肉がよく発達します。

特徴（とくちょう）　その3

体表が毛で覆（おお）われています。クジラやイルカはツルツルしていて毛がないように見えますが、一部の種類には感覚毛（例えば、ネコやイヌのヒゲと同じような毛）が生えます。

特徴（とくちょう）　その4

一定の体サイズで成長が停止します。生きている間、ずっと大きくなることはありません。

特徴（とくちょう）　その5

体の中の胸腔（きょうくう:心臓や肺などがある部分）と腹腔（ふくくう:胃腸や肝臓などがある部分）を分ける横隔膜（おうかくまく）があります。

横隔膜は、呼吸する時に動かす、おなかの中にある膜で、これがけいれんすると、しゃっくりが出ます。

特徴（とくちょう）　その6

頚椎（けいつい:首のホネ）が一般に7個です（例外あり）。キリンの長い首も、私たちヒトの首も、ホネは7個です。

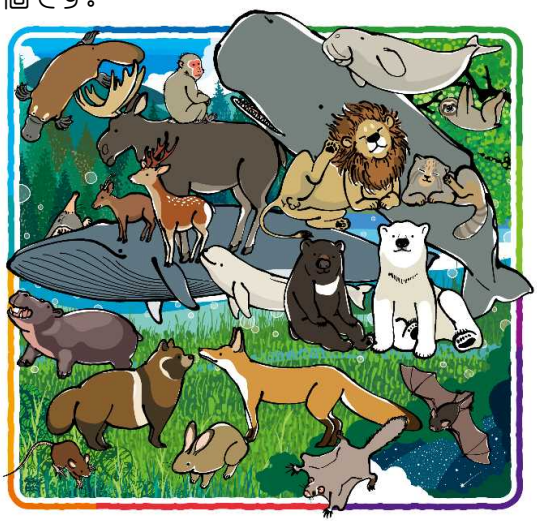

図　ほにゅうるい展のメインビジュアル

◆展示のみどころや工夫は？

今回の展示は、6つのコーナーからなります。それぞれのみどころを簡単に紹介します。

1　あつまれ「ほにゅうるい」

ホッキョクグマ、ジャイアントパンダ、カモノハシ…。世界の珍獣、動物園の人気者、身近な種も大集合！いろんな「ほにゅうるい」の、はく製やホネをくらべてみましょう。

2　千葉にきた幻の「ツノシマクジラ」

2017年夏に千葉県勝浦市に漂着した稀少種ツノシマクジラ。当館が回収した、日本で4個体目となる貴重な標本を公開します。

3　くらべてみよう「ほにゅうるい」

ほ乳類の重さ、形、大きさなどを、模型などのハンズ・オン資料で再現しました。常設展のマッコウクジラの頭骨を縮小して3Dプリントした模型も展示する予定です。

さわって、くらべることで、ほ乳類を体感して理解を深められるように工夫しました。

（タヌキの足あと）

4　クジラの仲間はカバ？ほ乳類研究の最前線

近年の分子系統学による研究で、ほ乳類の進化や系統分類の学説は大きく変わりました。最先端の情報を、わかりやすく紹介します。

5　どうなっているの？千葉県のほ乳類

外来種のキョンやアカゲザル、絶滅危惧種（ぜつめつきぐしゅ）のアカギツネやスナメリ。身近なほ乳類の問題を、最新のデータで解説します。

アカギツネ

スナメリ

（アカギツネの写真は、NPO さとやま　斉藤　裕　氏　撮影）

6　星野道夫さんミニ写真展

北米大陸の極北の自然に暮らすほ乳類の、ありのままの姿を、美しい写真を通して伝えます。

◆展示の裏話は？

当たり前ですが、展示を作るためには、展示品である標本が大事です。展示する標本は、中央博物館が長い時間をかけて収集してきたものと、他の博物館や研究機関から借りてくるものがあります。ここでは、展示標本にまつわる裏話を少しだけ紹介します。

中央博物館が収集してきた標本の中には、ここ数年の間に、博物館の職員が力を合わせて収集してきたものがあります。特に大変だったのは、大型のほ乳類剥製コレクションの寄贈を受けた時です。ビルの8階から標本を搬出した時、はく製が大き過ぎてエレベーターに入りませんでした。そこで、ヘラジカやホッキョクグマなどを、階段を使って人力で降ろすことになりました。実際に標本を運んだ職員は、「今日、ここで、ヘラジカにつぶされて死ぬかと思った…。（by K 職員）」「階段の踊り場でホッキョクグマを方向転換するのは無理だ……（結局、うまく回しました）。（by M 職員）」などと言いながらも頑張って運び出しました。このように、展示に不可欠な標本を集める作業には、多くの職員の協力が必要なのです。

（イタチの足あと）

天井の梁をよけながらアカシカを運ぶ職員たち

この他に、展示の裏話を、写真入りパネルで紹介する予定です。

他の博物館や研究機関から展示品を借りるためには、まずは下見に行って、展示のテーマに合うものを選定します。すべてサイズを計測し、展示場所だけでなく、搬入の通路などのルートを通ることができるかも考慮しなくてはなりません（エレベーターに乗らない、ということもありますので…）。そして、貸してもらうために、様々な条件を交渉します。例えば、輸送方法。はく製は専用の木箱に入れて固定して厳重に運ぶことがあります。はく製や毛皮は光にあたると退色してしまうので、照明や光環境にも条件がつきます。また、返却する時に害虫などを駆除する「くん蒸（くんじょう）」の方法も相談します。ほ乳類の場合、ネズミからクジラまでサイズがいろいろで、はく製やホネの標本、プラスチックの模型など素材も多様なので、標本の扱い方（ハンドリング）に関する幅広い知識が求められます。また、他の博物館と借用期間が重なってしまい、調整することもあります。今回も、他の博物館と重なる期間があり、各館の企画展のテーマから標本の優先順位を考慮して、融通しあいました。普段から他の博物館の学芸員と交流しているので、いざという時に助けあうことができました。

展示を通して伝えたいこと

（アナグマの足あと）

ほ乳類は、多くの人にとって、姿や名前は知っているのに実物をちゃんと見たことがなく、イメージが先行する生き物のように思います。例えば、多くの人がご存知のカモノハシ。私は子どものころ初めてはく製を見た時に、「思ったより小さい…あれ？」と思った記憶があります。

私の研究対象の一つであるクマ類に対するイメージも、テディベアのようなかわいらしさと、人を襲う凶暴さが入り混じるものです。クマに興味のある方は多いのですが、本当のクマの性質はそれほど知られていないように感じます（学生時代、誰もが知るクマですら、基礎的な生物としての情報が知られていないと知って驚き、研究対象として興味を持った経緯があります）。

今回の展示では、全体を通してイメージが先行しがちなほ乳類の、本当の姿を伝えていけたらと思っています。実物のほ乳類を観察する体験を通して、ほ乳類には、姿かたち、暮らし方の多様性があることを理解してもらいたいです。そして、一人一人が「あれ？」と思うような、新しい発見をしていただければうれしいです。さらに興味がある方には、最先端の研究や、身近な千葉県で起こっている問題の最新の正確な情報を通して、ほ乳類は奥深い面白い動物であること、私たち人間はほ乳類のことを思いのほか知らないことも伝えていきたいです。

（動物学研究科　下稲葉さやか）

ほ乳類は馴染みのある動物の一つだと思います。動物園やテレビ番組、図鑑などでほ乳類を見る機会は多くあります。私も水族館やテレビ番組で見たクジラたちに惹かれて研究の世界に入った一人です。

そんな比較的馴染みのあるほ乳類ですが、よく知った種類から名前を聞いたこともない種類まで様々なものがいます。今回の企画展では、いろいろなほ乳類についてご紹介します。それぞれの種類の意外な関係や、よく知った動物の意外な一面を紹介できればと思っています。また、私自身がほ乳類について面白いと感じていることをはじめとして、ほ乳類のいろいろなことを伝えられれば嬉しいです。

そして来館していただいた方には、小さな発見から大きな発見まで、ほ乳類に関して何かしら新しい発見をしてもらえるような展示にしたいと思っています。

子どもも大人も楽しみながらほ乳類について学べる展示やイベントを目指しています。

（生態学・環境研究科　宮川　尚子）

あなたの好きな ほ乳類は？

（イヌの足あと）

「皆さんは、好きなほ乳類がいますか？」おそらく、普段そのような質問を受けたことはないのではないでしょうか。さあ、この質問に当館職員たちは何と答えるでしょう。このコメントを見て、当館職員に親近感（？）をもっていただければ幸いです。　（教育普及課　平津　知宏）

①好きなほ乳類
②好きな理由
【所属　名前】

①カヤネズミやシマリス
など、げっ歯類
②小さいし、見た目がかわいい。飼いやすいところもいい。小学生のころシマリスを飼っていた。
【自然誌・歴史研究部長　斉藤明子】

①カピバラ
②まるで、スライスしたかのような、まっすぐな見ためのの顔と鼻。動きが、ゆっくりなところ。
【動物学研究科長　萩野康則】

①ネコ
②見た目がかわいい。10年ほどネコを飼っていた経験がある。身近な存在に感じられる。
【動物学研究科　駒井智幸】

①クジラ
②「海から陸へ。陸からまた海へ。」という進化の流れが変わっていて気になるから。
【生態学・環境研究科　宮川尚子】

①イルカの仲間
②骨がかっこいい。特に頭の骨は、全体のフォルムがかっこいい。また、好きな特撮ヒーローがイルカベースだった。
【地学研究科　丸山啓志】

①モグラ
②大学時代、友人の研究テーマがモグラで、つかまえるのを手伝ったことがある。馴染みがある存在なので。
【房総の山のフィールドミュージアム　後藤　亮】

①イヌ
②犬を飼っている。人懐っこく、表情が豊かであり、ルールを教えてあげれば覚えてくれるという頭の良さが好きです。
【庶務課　吉村健平】

①ヒグマ
②大学時代に北大ヒグマ研究グループに所属し、大雪山にこもり、3週間テント生活で調査した経験があるから。
【企画調整課　平田和彦】

①ハツカネズミ
②人生で、初めて飼ったほ乳類がハツカネズミだった。小さくてかわいい。一方で、ちょっと悲しい思い出もある…。
【教育普及課長　斎木健一】

博 学 連 携

あさひ し りつまんざいしょうがっこう
旭市立萬歳小学校

ミニ展示「古い道具と昔のくらし」の活用

今回の博学連携コーナーは、旭市立萬歳小学校のご紹介です。

萬歳小学校には、3年生の社会科校外学習で、当館のミニ展示「古い道具と昔のくらし」を活用していただきました。学習には、道具の説明や自由見学に加え、自然と人間のかかわり展示室内にある農家を使いました。

上の写真は、座敷部分に上がって、火鉢を囲みながら解説を聞いている様子です。そして、ただ解説を聞いているだけではなく、担任の先生も一緒に、この空間や道具を活かして、昔のくらしについて解説をしてくださいました（下の写真）。

短い時間で即興的でしたが、研究員と学校の先生で一緒に授業を作ることができました。

（教育普及課　平津　知宏）

写真（上）
気密性の低い家では、部分暖房で体を温めていたことを解説する白井研究員

写真（下）
「みんなの家の畳と、この座敷の畳、ちがうところは？」と問いかける岡野先生

中央博物館だより　Ｎｏ．７３
平成３１年３月発行
編集・発行●千葉県立中央博物館

本館
〒260－8682　千葉市中央区青葉町 955-2　TEL 043-265-3111　FAX 043-266-2481
大利根分館
〒287－0816　香取市佐原ハ 4500　TEL 0478-56-0101　FAX 0478-56-1456
大多喜城分館
〒298－0216　夷隅郡大多喜町大多喜 481　TEL 0470-82-3007　FAX 0470-82-4959
分館 海の博物館
〒299－5242　勝浦市吉尾 123　TEL 0470-76-1133　FAX 0470-76-1821